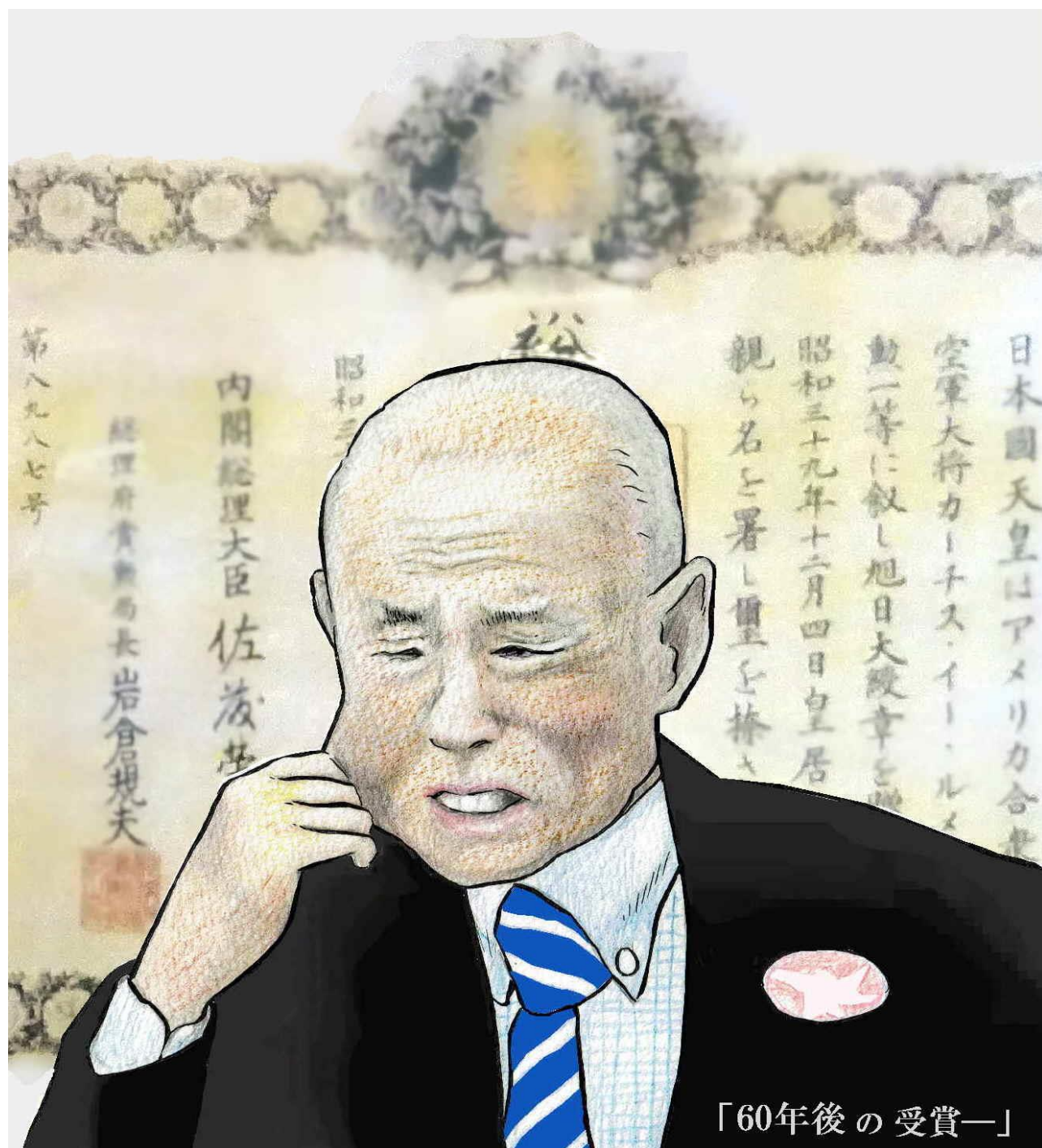


月刊 JMITU ティニコカ



11月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2024 年発行

No.479

2024年 秋闘・年末一時受結

私達 J M I T U セガ労働組合は、セガ、S L S に対し、秋闘・年末一時金の妥結を執行部了承で伝えました。

回答は以下です。

セガ回答

年末一時金

基本給に係数2.0を基準とした賞与額

一人平均 709036円

支給日12月6日(金) 予定

その他の要求には応じられない。

セガ冬季一時金

支給額＝基本給×2.0×等級別個人評価係数（別表1）－勤怠評価額

別表1. 等級別個人評価係数

評価	S	A+	A	B+	B	B-	C
係数（一般正社員）	1.20	1.10	1.05	1.00	0.95	0.90	0.80

別表1. 賞与資格別基準額

	資格別基準額
MS2	220,000
MS1	200,000
A2	160,000
A1	140,000

S L S 回答
年末一時金
資格別基準額に係数2.0を基準とした金額
一人平均 711285円
支給日12月6日(金) 予定
その他の要求には応じられない。

SLS 冬季一時金

支給額＝【資格別基準額(別表1)+こども手当】×2.0+人事評価額－勤怠評価額

人事評価額＝評価ポイント単価×個人評価ポイント（別表2）

別表2. 賞与評価ポイント

評価	4	3	2	1（標準）	0	-1	-2
MS2	260	230	200	170	140	110	80
MS1	215	190	165	140	115	90	65
A2	180	160	140	120	100	80	60
A1	160	140	120	100	80	60	40

掌編小説

明日は悔い

仙洞田一彦

たまたま過去を振り返るあつまりが続いた。一つは四十五年間で機関紙二千号発行を祝うあつまり。もう一つはそれより長い年月、付き合いのあつた人を偲ぶ会だ。

身近なことだから、否応なしに自分の過去もよみがえる。よみがえったものは悔いばかりだ。世には悔いて告白した「懺悔録」というようなものもあるようだから、綴るのもそれなりに意味があるのかもしれない。私の懺悔など書いても仕方ないと思いつつ、言い訳を書く。

偲ぶ会は故人の思い出を語り冥福を祈る。私が定年退職

した年、故人、彼は労働争議を抱えていた。争議の内容は忘れてしまった。すでに二十年近く前のことだから多少ずれがあるかもしれないが、退職と重なっていた記憶があるので、時期はおそらく確かだろう。

彼の職場は、私の住んでいるところから近い所にあつた。争議だから会社の門前ビラ配布の行動があつた。私は定年退職の身だから、朝、時間がある。近い所にあるにもかかわらず、行かなかつた。彼の名を聞くと、その「悔い」が頭に浮かぶ。応援に行かなくて申し訳ないという思いが引っ掛かっていた。

第二の人生というが、私は定年を機に、文筆活動に専念

しようと思っていた。在職中も文学に関わってはいしたが、専念できる時間はわずかだった。送別会の挨拶で「定年後は読み、書きに専念したい」と言った。

毎日三十分、一時間でもいいから机に向かうことだと文学の先輩からも言われたし、いまの私もそう思う。小説を書くには、長時間の集中力が必要になる。ところが途切れると大変なのだ。

日曜大工と同様、日曜作家などという言葉もあつた。大工の方は経験がないから分らないが、日曜作家は分かる。たとえば前の日曜日に原稿用紙五枚でも十枚でも書いたとする。今度の日曜日、続きを書けばいいのだが、そう簡単には行かない。前の日曜日に

原稿に向かっていた時の、感触、感覚、思いを取り戻さなければならぬ。どういう出来事なのだろうか。場面のイメージ、登場人物の像。これまでの展開、これからどう展開するか、などなどいっぱいある。前の日曜日に筆をおいた状態にまで戻らなければならぬ。

日曜日から日曜日までの間、たとえ平々凡々な毎日であつたとしても、頭は小説世界から離れている。日曜作家を経験した人はおそらく書きかけの小説をたくさん持っているに違いない。一週間たつたら、感覚、熱情を取り戻せずに、その作品の創作意欲を失ってしまい、「終わり」を書くところまで行かないことも多いのだ。

それが数年後、十数年後、作品として実を結ぶ場合もある。だから一口で無駄とは言いいれないが、そのまま資源ゴミか燃えるゴミとして出される方が多いと思う。

作品を書くこうとする意欲、創作動機を持続させるのが大変なのだ。能力があればいいのだが、そうはいかない自分は大変さを味わった。

定年と同時に、毎日、原稿に向かうことにした。一日は長いものだから、朝だけピラ配りに行ってもいいではないか。そうは行かない。私の脳は、出掛けたために途切れた集中力を取り戻すのが大変だった。すまないとは思いつつ、文筆の仕事に向かった。

最近芝居を見る機会があつ

た。それは秀吉と利休、そして利休の娘お吟の葛藤を描いたものだった。秀吉は時の権力者。秀吉の茶の道の師匠が利休。秀吉は朝鮮出兵を決めるが、利休は反対し、秀吉の怒りを買う。秀吉は、利休の娘お吟を側室に差し出せば許す、そればかりでなく大名にするという狡猾な条件を、利休に出す。しかし、利休はその条件をきっぱり拒否し、切腹させられる。

「悔い」を思い出しているうちに、時期も重なった、この芝居が絡んできた。

もしこの時利休が、秀吉の要求を呑んで、お吟を側室に差し出したらどうなると思つたのだ。後世、卑劣な人物として利休が描かれるかもしれない。実際の出来事だったら

死への恐怖から「拒否」を後悔したかもしれない。

切腹場面は利休の一人舞台だったが、心中については語られない。観客の想像に任せられている。茶道の頂点に立つ者として、自分の命と引き換えに娘を差し出すようなことはできない。無念さはあまりあるかもしれない。いや、残念無念などというのは俗人の思いかもしれない。

歴史に名を残す人物と比較するのもおこがましいが、庶民でも似たような局面に立たれることがあるのではないかと思つた。

また似たような局面があるからこそ、時代物の芝居だが上演の価値があるのかもしれない。

二者択一を迫られる場面は利休のような重い選択でなければ、庶民にも日常あることだ。

善か悪かはつきりしていれば、選択も容易ではないかと思うが、追い詰められれば悪を承知で選択する「闇バイト」の例もあるので、簡単には判断できない。

どちらを選ぶべきか難しい場合も多い。難しい時には、どちらを選択しても悔いが残るかもしれない。しかもその答えがすぐに出るものばかりではなく、何年か後、十数年あるいは数十年後に分かるということも多い。

明日になって残るのは、悔いだけかもしれない。もっとも、発表後に悔いが出るのはいつものこと。